失われた「場」の希求としての“移住”とその可能性

——若者移住者が見出した「関わりしろ」の視点から——

角 亮 典

はじめに

本論文の目的は日本における若者（15歳以上40歳未満⁽¹⁾）の「学校から職場」に留まらない社会参加と自己形成の道筋の一端を、若者移住者を対象とすることで明らかにし、その移住という行為に留まらない可能性を検討することである。

社会の標準的なルートであった「学校から職場」という移行の道筋の崩壊が指摘されて久しく、長期的な経済の低成長の影響もあり、現代の若者たちは不確定かつ不安定な移行を自身の舵取りで歩まざる得ない状況が続いている。また不登校については2022年度に29万人（文部科学省2023）、「ひきこもり」については15歳から39歳の人口の2%にあたる推計146万人（内閣府2023）と、それぞれの前回の調査の結果を上回る数字が報告されており、「学校から職場」という経路に限らず、学校や社会そのものから子ども・若者が漏れ落ちてしまっている。加えて「生きづらさ」という主観的かつ実存的困難さを表現する言葉が日常的に用いられるようにもなっており、若者の困難さは、構造的な就労達成やキャリアの困難さに留まらず、様々な場において全域的かつ実存的な領域にまで広がっている。こういった状況に対し、若者の移行研究においては「学校から職場」という就労移行を中心に問題化がされてきたが、学校からの撤退や実存的な困難が語られるようになるなかで、若者を支える「場」に注目しより広範な領域での困難さや、子どもから大人になる過程としての移行という広義の移行過程を捉えようとする研究もなされている。

他方で地域おこし協力隊に代表されるように、地方への移住者は一定の数に及び、人口減少や過疎化を背景に社会的に注目を集めている。そのなかにはいわゆる若者の姿もあり、“自分らしく”働く姿や、地域の人間関係のなかで生き活きと活動する様子がみられる。「消滅可能性都市」という言葉に代表されるように、多くの地方自治体や農山村・漁村は人口減少や過疎化に悩まされている。そのため外部からの転居者の存在や新たな雇用の創出は自治体の持続性に直接関わるものであり、地域研究においても地域への定着や、地域へもたらされたインパクトなどが中心に検討されてきている。

本論文では「移住」という生活全体をつくりかえる行為を、移行期にある若者が選択し経験し

ていることに注目し、就労移行に留まらない広義の移行の実践として対象化する。「地方移住者」は地域に対して何をもちたかという点や、なぜ移住をしたのかという理由や背景が注目されてきた。しかし若者移住者たちは、移住先の地域への包摂が一定程度なされ、その土地でどのように生きていくのかの答えを得ていくプロセスにいたのである。それは地域という「場」において、広義の移行の最中にある若者たちであると考えることができる。改めて、本論文ではこのような視座に立ち、若者移住者の経験の語りから、若者の広義の移行を支えるものやその実現に寄与しているものを明らかにし、その上でそれが移住者に留まらない若者の広義の移行においてはどのように置き換えられるのか、の可能性を検討する。

そのために第1節では現代の若者全体がどのような移行の環境に置かれているのか、そこでどのような問題が生じているのかを確認し、若者の移行期を広義に捉える〈大人へのわたり〉という視点から、若者にとって重要とされていることを取り上げる。続く第2節においては移住者研究について概観し、「関わりしろ」という言葉を取り上げることで、若者にとって移住という選択がどのような意味を持つのか、そして「関わりしろ」と〈大人へのわたり〉との重なりあいから、改めて若者の移住が一種の移行実践としての側面を持っていることを示す。その後の第3節及び第4節では、実際の若者移住者へのインタビューを通して実際の経験を明らかにし分析することで、若者を支える具体的なものが何か考察をする。最後にそれらを総合し全体を振り返ることで本論文のまとめを行う。

1 若者の「生きづらさ」と〈大人へのわたり〉

第1節においては前提となる若者にまつわる先行研究の検討として、第1項では若者が置かれている移行環境について、第2項では若者が抱える「生きづらさ」について、第3項では就労移行に留まらない〈大人へのわたり〉についてそれぞれ概観し、現代の若者の状況とそれに対してどのような方策が考えられているのかをみていく。

1-1 学校から職場への移行の不安定化

現代日本における若者の移行環境の変化について様々な研究が言及しているが、共通しているのは、90年代以前は学校から職場への集団的で安定的な移行がある程度保障されていたが、それが90年代以降では崩壊した、ということである。例えば、メアリー・C・ブリントン（2008: 23）は以下のように2点に分けて指摘している。「1. いまの若者の「人生の道筋」が特殊なのではなく、むしろ特別だったのは、1960～80年代の日本で標準的だった人生の道筋のほうだということ。2. 1990年代の日本で、大人に移行する標準的な道筋を支えていた社会の仕組みが崩壊したこと。」

まず1. の1960～1980年代の日本で標準的だった道筋というのは、日本における「あたりまえ」

失われた「場」の希求としての“移住”とその可能性

の人生のコース、「学校→職場→結婚→子育て」（プリントン 2008: 47）と、それを支える「正社員」というポジションである。それは企業の年功賃金と企業主義的福祉供与によって支えられ、ライフスタイルの社会的標準が形成された（乾 2010: 35）。そして、「新規学卒就職」が若者を（学校から仕事）へ導くのに重要な制度として役割を果たした（乾 2010: 37）。同時に「新規学卒一括採用」、一般的に新卒一括採用と呼ばれる、新規の学卒者を卒業時点で一斉に雇用期間の定めのない正社員として雇用する仕組み（児美川 2011: 105-106）が機能することで、学校から仕事への「場」から「場」への切れ目のない接続がなされ、80年代までは日本の経済・雇用の安定を支えていた。

その崩壊を指摘しているのが2.である。これはプリントンに限らず指摘されており、90年代以降この経路が機能を十全に果たさなくなり、日本において若者の移行が不安定化、それに伴いライフコース自体も揺らぐことになった。児美川（2011: 76）はその要因について、①バブル経済後の日本経済の失速②グローバル化の影響③日本企業の採用行動・雇用戦略の転換④そうした転換を起しやすとした政府の労働力政策の展開、の4点を指摘している。特に、③に関しては1995年の『新時代の日本的経営』（当時の日本経営者団体連盟）において、また④に関しては1998年から2003年にかけて断続的に行われた労働基準法及び労働者派遣事業法の改正においてそれぞれ特徴的にみられるように、長期雇用と年功型賃金に支えられた「正社員」中心の雇用形態を見直し、有期で効率的に雇うことができる派遣労働者を“扱いやすく”する方向に舵を切ったと言うことができる。結果として、「大人に移行する標準的な道筋を支えていた社会の仕組み」であった学校から仕事への「場」から「場」への切れ目のない接続は実態を失い、若者は安定的な「場」を持たずに不安定な移行過程を歩まざるをえなくなった。

1-2 「場」の喪失によって生じる若者の「生きづらさ」

このような「場」なき移行や社会不安、将来不安を背景として、困難な状態や状況を指し示すために昨今では様々な領域において、「生きづらさ」という言葉が使用されるようになってきている。元は精神医学・福祉の領域において、発達障害やひきこもりなどの既存の制度に当てはまりにくい現象を表すものとして登場したものである（山下 2012: 56）。土方由起子（2010: 260）は「生きづらさ」を、「入れ子式の苦しさ」とし、複数の見えにくい苦しさで構成されその本質が分かりにくく、自他ともに理解しづらいことがより苦しさを増大させるとしている。貴戸（2022: 35）は山下（2012: 67-68）をふまえ、「①客観的に同定できる状態ではなく当人の評価であること②困難の対象や困難の原因が確定的ではないこと③解決策や対処法が見えないこと」と「生きづらさ」の要点を整理している。また「生きづらい」と言うことで、苦しみの原因が何かを棚上げしたままで、その人が苦しんでいる現実をとにかくも描写できるため、「生きづらさ」は便利な言葉であるとも指摘している。

他方、社会学的視点における理解ではベックの個人化とリスク社会の理論が念頭におかれている。貴戸（2022: 37）は、「生きづらさ」が個人の苦しい状況を曖昧に表現する言葉がゆえに、その困難が個人ごとに分断されてしまい孤立しやすいとして、生きづらさを「個人化した「社会からの漏れ落ち」の痛み」（貴戸 2018: 90）としている。同様に乾（2009）は「社会的な矛盾を、個人で引き受けなければならないと思込まされてしまうしんどさ」と説明しており、社会的排除とその対処の個人化が「生きづらさ」の主たる要因として考えられている。加えて、貴戸（2022）は従来の労働者の貧困では捉えられないような「社会的排除」の現象が、グローバル化・ポスト工業化を経験した先進国における共通の現象でありながら、なぜ日本においてはそれが「生きづらさ」という形で前景化しているのか分析している。前項で M. プリントンに代表させて述べた、「場」に支えられた「社会的標準のライフコース」の喪失と「生きづらさ」を結びつけて、貴戸（2022: 46）は日本においては具体的な「場」に所属していることが、その「場」で提供される機能を享受する以上の意味を持っており、社会構造の変化によって「場」が揺らいでいる現代においては、「場」の喪失による「全域的な存在不安」を抱えるリスクを多くの者が背負っていることを指摘している。その上先にみたように「生きづらさ」と表象されるような困難さや苦しさは、その特性上の曖昧さゆえに個人が孤立して抱えることになり、社会との関係断絶の感覚が強く経験される。またその経験自体が共有されることも共感されることも困難であり、より孤立してリスクを抱えてしまうことも指摘されている。

1-3 「学校から職場」に限定されない若者の〈大人へのわたり〉の危機

ここまで移行の「場」の喪失とそれに伴う「生きづらさ」について概観してきた。そこでの移行が前提としているのは「学校から職場」であり、労働および就労に主眼を置いているものである。他方で「生きづらさ」という実感自体は労働および就労に限定されるものではなく、学校や職場に限らないより広範な「場」について検討する必要がある。

そこで阿比留（2022）によって提示されている、「〈わたり〉の危機に直面する子ども・若者が、大人として生きていくことと向き合うことを支える教育や学びのあり方」である、「〈大人へのわたり〉教育・学び」の構想」を本論文では取り上げる。

まず「わたり」という表現について、阿比留（2022: 8-9）は鈴木聡（2002）と平塚慎樹（2009）を引き合いにし説明している。どちらも「わたり」という言葉を子ども・若者の「移行期」の説明として使用しており、鈴木（2002: 12）は、「高度経済成長期以来形成され定着してきた日本の支配的なライフサイクル観」が崩壊し、成人期自体も不安定化しているとして、「わたり」自体の危機と、わたった先の成人期の危機を二重の危機として指摘し、若者の就労に留まらない“大人への”移行自体の危機を示している。平塚も同様に「わたり」という言葉を用いて移行期を説明し、最もみえやすい現象として「おとなへの“わたり”の個人化」が起きていると指摘してい

る。「おとなへの“わたり”の個人化」を平塚（2009: 181）は自己の進む先を自己で決定し自己で責任を持たなければならないと思う、思わされる社会的風潮と説明している。

阿比留（2022: 9）はこの兩名の「わたり」の言説について、職業的自立のみに焦点を当てず、個人が対応すべき問題ではなく、社会の全体状況を捉えながら「子どもから大人へなっていくプロセス全体の困難」に着目することができるとして評価しつつ、この「わたり」の危機に対応する概念が構想されていないとも指摘している。その上でより具体的な実現の方途として、

〈大人へのわたり〉とは、家庭・学校にとどまらず、より広い関係性にひらかれた社会の中で自分が承認されつつ、「もちば」を見だし、そこで「出番」をもてるようになることによって実現される（阿比留 2022: 10）

と論じている。阿比留による「〈大人へのわたり〉教育・学び」の構想においては、それを可能とするより具体的な場として「居場所」が想定され論が展開されていく。本論文においては、この子どもから大人になっていくプロセス全体としての〈大人へのわたり〉と、その実現に必要なだと述べられている「もちば」と「出番」について特に重点を置き、具体的な実践として、第2節において若者移住者について検討していく。

2 若者の〈大人へのわたり〉実践としての“地方移住”

前節では若者の移行及び生きづらさ、そして子どもから大人になっていくプロセス全体を射程とした〈大人へのわたり〉という視点について概観した。翻って第2節においては、本論文が対象とする若者移住者が先行研究上でどのように扱われてきたのかを第1項で確認し、第2項では若者移住者が地域で見出している「関わりしろ」という言葉を手がかりに、若者移住者と前節との接合を試み本論文の枠組みを改めて提示する。

2-1 「自己実現」として扱われてきた若者の“移住”

日本における「移住」にまつわる主要な研究として、ライフスタイル移住（Lifestyle Migration）研究と「田園回帰」論の2つが挙げられる。

ライフスタイル移住とは、「先進国を中心とした中間層の移住を考察する上で重要な概念」で「経済的理由や仕事や政治的理由など伝統的に主流であった移住理由以外の、より広範な意味での生活の質を求めての移住」⁽²⁾（長友 2015: 24）である。「個人の生き方や生活の質に対する願望が移住の意思決定に大きく影響を与えている現代的な移住」（長友 2015: 24）と説明されている。性質として中間層の移住が対象となりやすく、様々な地域への移住者が取り上げられている⁽³⁾。

「田園回帰」論は、農山村移住という行動だけを指すのではなく、漁村を含む農山村に対して

国民が多様な関心を深めていくプロセスを指している小田切（2014: 電子版 NO.2093）は説明している。例えば2014年に行われた『農山漁村に関する世論調査』においては、都市居住者の31.6%が「農山漁村地域に定住してみたいという願望」が「ある」または「どちらかというところ」と回答しており、「田園回帰」というライフスタイルや価値観の変化が生じていると捉えられている。こちらも中山間地域や農村漁村への移住者の生活や、地域での活動とそのインパクト、地域住民との関係構築についての研究が行われている⁽⁴⁾。

「田園回帰」とライフスタイル移住の類似点と相違点については、石川（2018: 6）が整理している。類似点としては、農山村へのポジティブな評価及び都市と農村の共生を前提とするような新たなライフスタイルの創出を挙げている。最も顕著な違いとして挙げられているのは、地域にとっての移住者受け入れの意義である。海外におけるライフスタイル移住の受け入れ地域が、主に移住者による消費を期待しているのに対し、田園回帰論では移住者に働き手として住民とともに地域づくりを担う役割を期待している。

この2つの移住者を対象とした研究においては、「どこでどのように暮らすのか」というライフスタイルにおける選択としての移住が前提となって取り扱われている。その結果若者の移住者については「自分探し」や「自己実現」の側面によって移住の背景が理解される。そのため前節までにみてきたような若者の移行や〈大人へのわたり〉のような観点はみられず、地域を通じた社会参加も「地域づくり」の枠組みによって理解されることで、若者にとっての意味や意義といったことは後景化しやすい。

このことは片山・牧野（2018）の若者移住者への視線によって二次的に理解することができる。片山・牧野は教育社会学研究において「地方の若者」がどのように扱われてきたのかを整理するなかで、地方に生きる若者の一形態として「移住者」とその暮らしを紹介する雑誌である「ソトコト」を取り上げている。片山・牧野は地方の若者を、求人が少ない地方で「なんとかやっていく」若者とし、「ソトコト」に掲載された若者移住者を対比させる形で以下のように述べている。

こうした記事のなかに登場する若者たちは総じておしゃれで、苦勞することもあれど総じてポジティブで、仲間たちや地域の人々と触れ合う中でとても楽しそうであり、つまりは地方暮らしのこうした若者たちはとても魅力的にみえる。（片山・牧野 2018: 21）

だが、近年の教育社会学的研究において扱われてきた「なんとかやっていく」若者たちと、地方創生の文脈のなかで政策的に、また自治体やメディアからも注目される「地方で暮らす」若者たちはほとんど重なっていない可能性が高い。（片山・牧野 2018: 21）

この指摘から読み取れるのは、若者移住者が一種の“成功者”や“キラキラ”したものとして

一般的に理解されやすいということである。ここで確認しておきたいことは、「自己実現以外の移住理由がある」や「若者移住者も実は困難を抱えている」ということではなく、ライフスタイルの変化や個別的な自己実現という理解によって、若者移住者の「移住」のある種〈大人へのわたり〉実践ともいべき側面が、見落とされてしまっているのではないかということだ。「ソトコト」の表象や移住研究においては、移住者がなぜ移住し、なにを目指し、どのような活動をし、その結果が地域にどのように作用しているのか（そしてそれがいかに魅了的か）、に焦点が当てられており、安定的な「場」が喪失した社会における、〈大人へのわたり〉を可能とするような若者の主体的な選択としての「移住」の可能性を見えづらくしてしまっている。

では、どのような観点からそのような実践性を伴うような「移住」を論ずることができるのだろうか。次項において若者移住者が地域に見出している「関わりしろ」という言葉を手がかりにしながら論じていく。

2-2 「関わりしろ」と〈大人へのわたり〉

本項では「関わりしろ」がどのようなものを指し示しているのかを明らかにしながら、〈大人へのわたり〉実践としての「移住」という枠組みを示す。

「関わりしろ」を「ソトコト」の編集長の指出（2016）はこのように説明している。

インターネットを通じて、これだけ多種多様な情報が簡単に手に入る社会に暮らす若者にとって、一方的に与えられるまちの魅力の情報はあまり価値がありません。いま、ほしいのは「関わりしろ」です。～中略～リアルな場所で求められるのは、自分ごととして参加できるか、ひとりの人間として、必要とされているかなのです。（指出 2016: 電子版 NO.328）

なぜ、都会志向より、地方に魅力を感じる若者が増えたのか。それはひとつに「関わりしろ」や「チャレンジしろ」が都会よりもずっとあるからでしょう。～中略～しかし、現在の地方は、東京のように生活のシステムに隙のないところは少なく、どちらかといえば、何を行うにしても、自分が関わらざるをえない状況のほうが多い場所です。これが、若い世代にとっては面白いのです。～中略～地方にまだ残っている仕事や暮らし、コミュニケーションへのざらざらした手応えとダイレクト感が心地よいでしょう。若い人たちの「生きることへの出番」がしっかりあるということです。（指出 2016: 電子版 NO.649）

ここでの「関わりしろ」は、社会や地域へのコミュニティや人間関係において、1人の人間として必要とされるようないわば代替不可能な個人として、直接的に関わることのできるような機会と経験のことを指している。

このような「関わりしろ」については、本論文がインタビューを行った気仙沼市の若者移住者もかなり近い感覚を持っている。例えば次節で取り上げる〔若者移住者の A〕は地域と若者の関わりについて以下のように述べている。

こっちは自分の役割があるじゃない。自分がやったらその影響はちゃんと出るし。(企業や都市では) なかなか自分にしかできない仕事ってないし、自分を必要とされてる感じもあまりなくて、自分の代わりはいくらでもいる、会社の一員でしかないから、もちろん会社の中では役割があって、(でも) 社会に必要とされてる感みたいのはあんまり感じられなかったんじゃないかな。

A が述べていることは指出の論じていることとほとんど同義である。指出の「関わりしろ」という表現を知っているの発言である可能性もあるが、1人の若者移住者の実感として「関わりしろ」の実際性が示されていると言えるだろう。

ここで指摘したいのは、「関わりしろ」と阿比留(2022: 10)が〈大人へのわたり〉の実現に必要と述べていた「もちば」と「出番」との近似性である。阿比留(2022: 10)は「もちば」と「出番」の獲得が〈大人へのわたり〉を実現すると述べているが、まさに指出が「関わりしろ」において説明されている若者が求めているものと重なり、また A が述べている実際の地域での関わりとも重なるものとなっている。このことから若者移住者は「関わりしろ」のある地域へと移住することで、「もちば」と「出番」を獲得し、〈大人へのわたり〉を成している可能性が一定程度あることがわかる。

そこで以降の第3節から第4節では、気仙沼市の若者移住者へのインタビュー調査を通して、若者が移住前後にどのような経験をしていたのかを明らかにし、「関わりしろ」が若者の〈大人へのわたり〉にどのように作用していたのか分析する。その上で若者が〈大人へのわたり〉を安定的に行うためには、どのような要素が重要となるのか考察していく。

3 対象の若者移住者と調査・分析について

3-1 気仙沼市の若者移住者の特徴

本論文においては気仙沼市に東日本大震災(以下、震災)が発生した2011年以降に移住した若者移住者たちを対象とし、予備的な1年間のフィールドワークと、インタビュー調査を行った。対象として気仙沼市の若者移住者が合致する特徴は、①若者が中心であること②移住後に地域社会への参加がなされていること③震災を契機にした移住という特殊性、の3点である。

まず「①若者が中心であること」について、対象となる移住者たちは移住時に20代であり、若者(15歳以上40歳未満)の範囲となる。また移住直前の所属が学生やフリーター、または初の就

職から3年以内で移住の選択がなされており、リタイア後の移住や明確なキャリアやライフスタイルの確立のための移住といった、手段的な移住ではないことから、若者の「わたり」の期間に移住が成されたと考えられる。

次に「②移住後に地域社会への参加が成されていること」については、移住者を中心とした一般社団法人設立や、地元住民との活発な地域活動など、移住後に地域社会に根付いた活動がされている。そのため移住後に移住者のみで孤立して活動や生活をしていたのではなく、地域との関わり合いのなかで彼/彼女らが「場」を見つけていったことが見受けられる。

最後に「③震災を契機にした移住という特殊性」については、最初期の移住者は震災ボランティアの延長として移住した者や、瓦礫撤去のような震災直後のボランティア経験がある者が多い。その経験は特殊なものであり、またその時期から地域と関わりを持ち続けているものは、若者や移住者という言葉では一般化しえない可能性がある。移住の背景や理由としての震災は揺るがし難いものである。しかし本研究における若者移住者の「場」に関しては、その成立の過程に震災の影響はあれど、若者にとっての重要性や意義は震災の有無によらないのではないかと。むしろ震災という特殊性によって生じた、若者にとって意味のある「場」を、震災がなくともいかに再現可能なのか、または置き換えることができるのかを考えることが、移住者に限らない広義の移行について検討することに繋がるのではないかと。

3-2 調査・分析枠組み

インタビュー調査は移住のタイミングが異なる合計12名に行っている。本論文においては震災直後や近いタイミングで移住をしたA、B、Cの3名の語りを中心に分析を行う。出身地や前居住地は東京や仙台市をはじめ様々であるが、本論文では都市対地方の対立構造ではなく、若者自身に焦点を当てるため出身地や前居住地での選別は行っていない。インタビューは一部オンライン及び対面にて1時間から1時間半程度で行い、大きく分けて①移住前のこと②移住後のこと③移住及び移住者について、の3点について半構造化インタビューの形式で質問した。具体的なインタビューの内容としては、①においては「移住される前は何をしていましたか?」「どのような学生(会社)時代でしたか?」といった質問、②については「移住後から現在にかけてどのような活動をしていますか?」「移住後に印象的だった経験はありますか?」といった質問、③については「自身の前後に移住してきた移住者に対して感じていることはありますか?」「移住者として意識していることはありますか?」といった質問を中心に行った。移住後の活動については日頃から聞かれることや意識することが多いのではないかと考えたため、インタビューの構造としては実際に移住した年から現在にかけてまでの来歴をききながら移住以前の活動や生活や移住後の経験にふれ、それらをふまえながら前後に移住した移住者についての質問を結びつけていった。

本論文においては、移住後、またそのプロセスにおいてどのような「場」をみつけ、どのよう

に参加を深めていったのか（またはそうではないのか）、そしてそれが若者移住者に何をもたらしたのかを問うことを課題とするために、その具体的な経験をきくことのできるインタビュー調査を選択した。また質問項目においては、プロセスについての話をきくために移住の前後のエピソードがききとれるものを意識した。加えて10年間という比較的長期間に連続して若者移住者が移住しているため、自身の前後の移住者への言及や比較からの語りもききとることのできる質問内容とした。

表1-1 インタビュー引用者の情報

A	女	29	2015年	7	漁師担い手育成/飲食店経営	2021年7月10日（対面）
B	男	32	2011~12年	11	社団法人代表	2021年7月12日（対面）
C	男	38	2011~12年	11	NPO職員/その他	2021年7月14日（対面）

4 若者移住者の語りから：「関わりしろ」がある地域への社会参加と自己形成

第4節ではインタビュー対象者のA、B、Cの語りを抜粋し、移住前と移住後の変化についてみていく。第1項では移住前についての語り、第2項では移住後についての語りをそれぞれ取り上げる。

4-1 移住前の若者のやっつけ「場」の持ちえなさ

まずはCの移住前について振り返った語りからみていく。

そんな時もポジティブではなく、そんなにうまくいかない部分もあって、ちょっとモヤモヤしてたりお金もたまらないし。他の人は、こんなに仕事を辞めやすいとか、動きやすい状況でもないだろうと。で仕事を辞めて8月に東北へ行った。

ボランティアに来たのも半分くらい逃げがあった。当時のフリーターの生活とかが良くないな、リセットしたいなという気持ち。ポジネガ半々くらい。

Cは震災ボランティアとして気仙沼に来る直前は飲食店のフリーターであり、そこから離れるための、述べている通り“リセット”するための移動、移住という側面があったことがわかる。他方いわゆる新卒1年目のタイミングで震災ボランティアとして気仙沼にやってきたBは、その前年度にあたる大学4年生の時の自身について、

失われた「場」の希求としての“移住”とその可能性

就活はマジふざけてましたね。ちゃんとやってなかった。一ヶ月半くらいしかやってないんじゃないかな。

大手は受けたんだけどダメで、ベンチャーに拾ってもらって。(略) そこで9月から(インターンとして)働きながら、すごい悶々としてたかな。

と語っており、就職活動には積極的になれなかったことを振り返っている。学生サークルにおいて中国での活動に力をいれていたBは、「(サークルの人たちが)中国の村人の話とかしなくなって」周囲が就活にシフトしていく様子に違和感があったとも語り、自身のもやもやとした状態について以下のように振り返っている。

フィールドは探してた。(略) 自分はなにかよくわからないけど、意気こんでるけど、なにに意気こんでんの、みたいな。

自分のフィールドを探している、という自覚はなかったから、今思うとそうなんだけどこのエネルギーをどうすればいいんだ、みたいな。

一方でCとBの後に移住をしてきたAは移住前の心境とそれを振り返って以下のように述べている。

東京で使えないからこっちに逃げてくるじゃなくて、東京でもやっていけるかもしれないけど、あえて自分はこっちを選ぶということをしたかったんだと思う。社会不適合者ではないよ、というか。でも働いていたら絶対続いてなかったと思う。

AもBと同様に大学卒業後すぐに移住しているが、大学4年の時の就職活動で内定を取った上で移住をしている。そのことを「あえてこっちを選ぶ」と表現している。ここでは都市からの逃走ではないということを、能力を証明した(就職活動で内定を勝ち取る)上で、あえて地方を選択したという積極的な主体性を示そうとしていたことがわかる。しかし、「働いていたら絶対続いていなかったと思う。」と振り返っていてもおり、周囲への示し方は“あえての選択”でありながら、自身のなかでは都市では“やっていけないかもしれない”という感覚が明確にあったことがわかる。

若者移住者の移住前についての語りをまとめると、移住前の環境において、自身の身の置き所、自身の納得感のある所属、居場所、及び何かの実践や活動ができるような「場」を持ちえていな

かったことがわかる。飲食店のフリーターや大学、及び就職活動における内定の獲得という、ある程度の生活の基盤が存在し、一般的に社会から排除されているとされる状態ではなくとも、若者が充実感を持って“いられる”と感じるような「場」になっているとは限らない。むしろ、“普通”とされるような軌道に乗っているからこそ、そこに違和感を感じていても簡単には離れられない、“普通”から離れることは“逃げ”であるとすら感じてしまうようなことも見受けられる。結果としては震災を契機にボランティアを通して地域に出会い、移住という選択によって「場」をえたものの、そのチャンスがなければ、具体的に移住前の状態から抜け出す選択肢や方策があったわけではなく、「場」が持ちえないなかで目の前の状況に個人がそれぞれひとまず対応していくという様子であったと考えられる。

4-2 若者移住者の地域での「場」の獲得と心境の変化

次に、それぞれの移住者が移住後に地域でどのように「場」を獲得し、心境が変化していったのか、インタビューの語りからみていく。

まず、Bは気仙沼市にやってきて感じたことを以下のように語っている。

この町でまだまだできることがあるっていうような、多分その感覚はすごい強かった。

端的な言葉ではあるが、前項でのBが自身のエネルギーを向ける先をみつけられずにいた語りをふまえると、地域に関わることでそこで自身ができることに出会っている様子が見受けられる。加えて震災ボランティアとして地域に出会ったのち、地元住民との関わりの中でのやりとりをこのように振り返っている。

1個すごい覚えているのは、地元の方に、“これからは一緒にやろう”って声をかけてもらったのは大きかったかもしれない。その人はそういうこと言わない人だったんだよね。(略)
“これからはやっていくべし”みたいなことを言ったのはすごく覚えていて。

Bが震災ボランティアとして地域に出会ったのち、地元住民との関わりの中かで、一緒にやっついこうと言われ、被災者とボランティアという関係から、地域に包摂された地元の人とよそ者という関係に変化した時のことを振り返った言葉である。このことを一つのきっかけにしてBは一過性のボランティアから、住民としての移住者としてより地域に根差した活動を志すようになる。

被災者と支援する側っていう関係だと、あと数ヶ月で活動は終わると思うんだけど、よそ者と地元の人という形でまちづくりに取り組んでいくのであれば、これは結構中長期になるだ

失われた「場」の希求としての“移住”とその可能性

ろうなっている感覚は（2011年から2012年の）年末年始で思ったな。

先の出来事とこの語りは、B自身の認識が変化したことと地域がBにとって「もちば」になり、「出番」を獲得したことを示している。それは地元住民とのパートナーシップによって託され、よそ者だからこそできることがあるという感覚である。そして注目したいのはBの変化と同時に地元住民も変化していることである。「そういうことを言わない人」であった地元住民が、Bと関わるにつれてBを手を取り合う者として認め自身もこれからをともに歩いていくことを伝えるに至ったという、その過程が背景にあることが推察される。

続けてAとCも地域での地元住民との関わりについて以下のように語っている。

○×さん（地元住民）がその娘には今まで高校卒業したら帰ってくるなと、こっちに帰ってきてもいい仕事ないからって言ったけど、私たちがこうやってきて、こんなに町のことを考えて頑張ってるのに、俺たちが自分たちの子供たちにそんなこと言っちゃいけないと思って最近はどうも言わないようにしてるし、いつ帰って来てもいいよって言うようにしてるって。そうやって言い始めたり、地元の人の変化として見えてきたのは、やっぱり4年目とか5年目あたりじゃないかな。

いまは移住者のAちゃんというよりも、XX（地元住民と立ち上げた活動拠点の名前）のAちゃんになっているんだろうし。

これはどちらもAの語りであり、地元住民とのやりとりを振り返った際の語りと、地域における自身の立ち位置の変化について語ったものである。こちらは明確に地元住民が変化している様子が語られている。地元住民が自身の子どもに対して、地域のネガティブな面を伝えていたのが、Aら移住者が地域に愛着を持って活動している姿を見続けたことで、そういったことを言わないように変わっている。このことからAらの活動をポジティブに受け止め、Aら自身のことを肯定的に捉えていることがわかる。移住者は地元住民からすれば“よそ者”であるが、このような受け止めの変化は、移住者の地域が自身の「もちば」であるという感覚と、「出番」として意味のあることが行えるという感覚を強めるだろう。結果として、Aが地元住民と立ち上げた活動拠点“の”Aとして認知されるに至るように、相互に変化しあうことによってAは地域を自身の「場」として感じているといえる。

以下の語りはCが自身の活動とそれに対する地元の高校生からの反応を振り返りながら、それが自身にとってどのような意味があったのかを述べているものである。

2012年の5月に、ビデオレターを作って、外の人に伝えたい、って高校生がいた。ガレキだらけのところをビデオ撮って、その子の基礎だけ残った全壊の家の前に案内してくれて、「私、震災後怖くて来れなかったけど、初めてここに来れました」みたいな話をしてくれて、なんかこういう機会つくってよかったな。みたいなことが強く心に残って、ちゃんと続けていこう（と思った）。

結構そのどれも（ビデオレターの一連の取り組み）、心残っててそこに。やっぱりなんか今ちょっと勢いで始めたものであったけど、確かに彼女達にとっても必要だし。僕にとっても必要だし。町にとっても必要だ、っていうような、なんかそういう感覚は結構あった。

どちらも自身が地域で活動していくなかで、地元住民との関わり自体や、地元住民に変化が生じていったことを語っている。Cはそのことをポジティブに受け止め、自身の活動を深めていく契機になっていることがみてとれる。まさしく、移住した地域が「もちば」になり、そこでの「出番」を明確に感じ取っているといえる。

若者移住者は移住後の語りについてまとめると、自身が深く身を置くことのできる「場」、「もちば」を自身の活動、「出番」を通じた地元住民との関わりにおいて、新たに獲得していることがわかる。BとCは震災ボランティアの延長上として、Aは地元住民との関わりを通して、自分自身が身を置く「もちば」としての地域という見方を獲得していっているように見受けられる。それをエンパワメントしているのは、地元住民の変化であり、変化の上でのポジティブなコミュニケーションと関係性である。一緒にやっ払い、移住者が頑張っているのだから自分たちも頑張ろう、新たな機会をつくってくれたから変わったなど、若者移住者の活動や実践に触発され変化し、その上で若者移住者に再び関わっていくという循環が生じている。

5 「関わりしろ」があるということの具体的な意味とその展望

前節では若者移住へのインタビューデータをもとに、彼ら彼女らの移住前と移住後のプロセスにおいて、どのような変化が生じていたのか、「もちば」と「出番」をどのように獲得していったのかを明らかにした。本節では再度内容をまとめながら、なぜ若者移住者がそれらを獲得するに至ったのか、第2節で提示した「関わりしろ」を手がかりに考察する。

まず改めて若者移住者の移住前について、移住前の移住者たちは共通して自己実現の不確かさや、社会からの漏れ落ちの予感や不安といった不安定な環境に身を置いていた。フリーターとしての就労や就職活動における内定の獲得など、一応の経済的な自立や多数派の移行の道筋に乗れているように見えても、内実として本人たちはそこに安定性や「もちば」のような主体的な関わりあい感覚を持ててはいなかった。一方、移住後の語りではそういった状態から地域と出会い

関わりあいをもち、結果として移住という選択をしていくなかで、地域において徐々に「もちば」の意識や「出番」を獲得していく様子がみてとれた。

そこで重要な役割を果たしていたのが、地元住民との関わりあいであり、その過程においての地元住民の変化であった。若者移住者が地域で活動をしていくなかで、地元住民の移住者に対する意識はもちろんのこと、地域に対しての考え方や自身に向き合うことにおいてもポジティブな変化がみられ、そのことがより移住者に移住した地域を「もちば」たらしめ、「出番」の意味や意義を強化しているといえる。これらのことを総合すると、若者移住者たちは移住を通して〈大人へのわたり〉を一定程度成しているともみることができ、その「移住」には自己実現やライフスタイルの実現といった個別的な目的達成に閉じきれない実践性が存在しているといえる。

なぜ若者移住者の「移住」が〈大人へのわたり〉になりえたのか。それは直接的には地元住民との関わりあいがあり、そこでの変化が地元住民と若者移住者に生じた結果、「もちば」や「出番」が若者に感受されたからである。そしてこの変化を可能にするものこそが「関わりしろ」の正体であると考えられる。第2節で取り上げた指出（2016: 649）は「関わりしろ」について、「関わりしろ」や「チャレンジしろ」が都会よりもずっとある」ことで「若い人たちの「生きることへの出番」がしっかりある」と述べており、「関わりしろ」は機会のニュアンスが強い。指出自身「自分が関わらざるをえない状況」と地方社会の状況を説明しており、その状況自体が「関わりしろ」であるような表現になっている。

しかし、第4節でみた若者移住者の経験はそのような環境的な余白によって中心的に支えられていたのではなく、地元住民との関わりとその相互変容の過程によってこそ成立していたといえる。つまり、「もちば」や「出番」というものが先にあり空席の椅子に甘んじて座ったわけでも、それらが具体的に与えられたわけでもなく、地元住民との若者移住者が互いに変化しあい、結果として地域に「もちば」と「出番」を見出すことができるようになったと考えるべきである。まとめると、〈大人へのわたり〉に結びつくような「関わりしろ」があるということは、その場が相互変容の可能性に開かれていることこそを指すといえる。

それでは、この「関わりしろ」があることを、「場」に相互変容の可能性があることとすることで、〈大人へのわたり〉にはどのような展望を持ち、より広義な若者の移行において新たな可能性を見出すことができるのか。

それは若者に対して教える、支えるといった、提供する-されるの関係に立つのではなく、社会の側、「大人」の側自体も変化をすることで、関係を切り結んでいくことの重要性である。社会の側、大人の側の責任や別個の役割を問うのでもなく、同一の目標に対して協同的な協力関係を要請するものでもない。単純に相互変容しえるような関係構築、影響を及ぼしあえるような関わりをどのように持てるのかということである。素朴だが、そのような関係が先にあってこそ、共通した目的に対して協同的な働きを持つことができるのではないか。このことは本論文で扱っ

た若者移住者たちの語りから明らかである。彼ら彼女らは地域づくりといった大義や個人の自己実現といったものに駆動されているわけでも、またそういったものに「出番」を欲しているのではなく、地元住民との相互変容的な関係性のなかから、己から己にとっての「もちば」と「出番」とを見出していた。それが結果として地域づくりや地域を活性化するための活動に実を結んだのである。可能性を論じるにおいて強調したい点はそこである。

相互変容的な関係性に関われた、「関わりしろ」がある「場」が若者の〈大人へのわたり〉を支える。そしてその「場」が目的化されないことが重要である。ここでいう目的や目標というのは、例えば地域おこしや若者の自立などを想定している。地域に対してであれ、個人や特定の集団に向けたものであれ、好ましい変化や問題解決が先んじて設定されないことが、「関わりしろ」とその先の広がりを支える。移行や自立は若者の課題とされやすく、支援や教育という形で、その安定や達成が目的化、目標化されやすい。しかし本論文で扱った〈大人へのわたり〉につながる「関わりしろ」での若者移住者の姿は、そういった「パイプライン」のような移行や自立とは異なるものであり、むしろ目的化、目標化されていない場であるがゆえに、若者の変容と大人や社会の変容との循環が生じており、〈大人へのわたり〉のアクターが若者だけではないことが示されている。つまり、「もちば」や「出番」を与えることなく、「もちば」や「出番」を獲得できるようにするのもなく、子ども・若者と大人や社会がともに、「もちば」や「出番」をつくっていくことが重要なのではないか。

6 おわりに

本論文では若者の「学校から職場」に留まらない社会参加と自己形成の道筋の一端を、若者移住者を対象とすることで明らかにし、その移住という行為に留まらない可能性を検討することを目的とした。第1節では若者の移行環境や「生きづらさ」の先行研究を概観し、本論文における移行の概念として〈大人へのわたり〉と、その実現に重要とされる「もちば」と「出番」の獲得について取り上げた。続く第2節では移住研究を整理した。また、近年若者移住者が地方の魅力を表すために使用している「関わりしろ」という言葉に「もちば」と「出番」が内包されていることに注目し、移住という行為と〈大人へのわたり〉との架橋の手がかりとした。第3節・第4節ではインタビューデータを扱い、若者移住者の移住前と移住後の経験について分析した。移住後の地元住民との相互変容によって、地域に自己の「もちば」と「出番」とを見出すに至ったことを明らかにした。第5節では第4節を受けて分析結果を「関わりしろ」に引きつけて考察し、「関わりしろ」は具体的な機会ではなく、相互変容の可能性に関われていることであると示し、〈大人へのわたり〉において「もちば」と「出番」についても機会として提供されるのではなく、子ども・若者と大人、社会との相互変容のなかで作りだされていくことが重要であることを提示した。

失われた「場」の希求としての“移住”とその可能性

本論文に残された課題は大きく分けて2点ある。1つめはインタビュー対象の限定性とそれによる分析の問題である。本論文では移住者のなかでも地域での活動を精力的に行っている者を取り上げており、若者移住者の多様さや全体を示すことはできていない。地元住民についても、移住者のインタビューに限られており、地元住民にも対象を広げインタビューを行いたいと考えている。また対象が限られていることによって、構造的な分析に限界がありこちらも今後の課題としたい。加えて2つめの課題は、研究の可能性についてあまり踏み込めていない点である。移住における若者の移行については論じることができたが、その上で若者の移行への新たな意味や意義の具体的な提示までは至らなかった。こちらは1つめの課題と併せて、今後の調査を進め分析を深めることで、検討を進めたい。

注

- (1) 日本の若者の各種政策において設定される基準から設定した。
- (2) 日本においては早い時期からライフスタイル移住の概念を扱っていた長友による (Benson 2009: 213) の翻訳。網丘 (2023: 58) や石川 (2023: 2) でも翻訳による定義が行なわれているが、ほぼ同内容となっている。
- (3) 例えば加藤 (2007) ではカナダへ「自分探し」として移住する若者が取り上げられていたり、中澤 (2020) では大分県への移住者を取り上げ、彼ら彼女らの働きかたについて論じられている。他にも高橋 (2018) では奄美大島での移住者の選別・受入に着目した研究がされている。
- (4) 小田切 (2016)、田中 (2017)、図司 (2019) など多数の取り組みがまとめられている。

参考文献

- Benson, M. 2009. A Desire for Difference : British Life- style Migration to Southwest France. In *Lifestyle Migration : Expectations, Aspirations and Experiences*, eds. Michaela Benson and Karen O'Reilly, 121–135. Farnham: Ashgate.
- Brinton, M. C. 2008. Lost in Transition Youth, Education, and Work in Postindustrial Japan NTT 出版。(池村千秋 訳, 2008, 『失われた場を探して：ロストジェネレーションの社会』NTT 出版)
- 阿比留久美, 2022, 「子ども・若者の「居場所」と〈大人へのわたり〉教育・学びの構想」早稲田大学文学研究科22年度博士論文。
- 乾彰夫, 2009, 「若者はなぜ職場をすぐに去るのか」『現代と教育』79号。
- 石川菜央, 2023, 「ライフスタイル移住の観点から見た日本の田園回帰」『広島大学総合博物館研究報告』10: 1-11
- 小田切徳美, 2015, 『農山村は消滅しない』(2014, 岩波書店), 岩波書店, (iOS-Kindle)。
- 小田切徳美他, 2016, 『田園回帰がひらく未来：農山村再生の最前線』岩波書店。
- 片山悠樹・牧野智和, 2018, 「教育社会学における「地方の若者」」『教育社会学研究』, 102集: 5-31。
- 加藤恵津子, 2007, 「「移民予備軍」の若者たち 後期モダニティにおける日本人青年の「自己」と世界観」『国際基礎教大学学法3-A, アジア文化研究』33: 231-244。
- 貴戸理恵, 2018, 『「コミュ障」の社会学』青土社。
- 2022, 『「生きづらさ」を聴く：不登校・ひきこもりと当事者研究のエスノグラフィ』日本評論社。
- 指出一正, 2016, 『ぼくらは地方で幸せを見つける——ソトコト流ローカル再生論』(2016, ポプラ社), ポプラ社, (mac-Kindle)
- 図司直也, 筒井一伸監修, 2019, 『就村からなりわい就農へ—田園回帰時代の新規就農アプローチ』筑波書房。
- 鈴木聡, 2002, 『世代サイクルと学校文化—大人と子どもの出会いのために』日本エディタースクール出版社。

- 高橋昂輝, 2018「奄美大島における I ターン者の選別・受入を通じた集落の維持—瀬戸内町嘉鉄にみる「限界集落論」の反証—」『E-journal GEO』13: 50-67.
- 田中輝美, 小田切徳美監修, 2017, 『よそ者と創る新しい農山村』筑波書房.
- 土方由起子, 2010, 「子どもの生きづらさとは何か—リスク社会における不登校」『奈良女子大学社会学論集』17号.
- 網川雄大, 2023, 「ライフスタイル移住概念を通してみる日本の人口移動研究」『文学研究論集』58: 57-72.
- 中澤高志, 2020, 「地方都市でなりわいを創る —大分県佐伯市にみる雇われない働き方の可能性」『日本労働研究雑誌』62: 67-84.
- 内閣府, 2023『こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）』
- 長友淳, 2015, 「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向 —移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して—」『国際学研究』4: 23-32.
- 平塚慎樹, 2009, 『おとなへの“わたり”の個人化—英国における若年支援政策をめぐって』豊泉周治他編『生きる意味と生活を問い直す—非暴力を生きる哲学』青木書店, 180-202
- 本田由紀, 2009, 『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.
- 牧野智和, 2021, 『「若者の地方移住」をめぐる語り—若者・場所・アイデンティティ』木村絵理子他編『場所から問う若者文化—ポストアーバン化時代の若者論』晃洋書房, 98-113.
- 文部科学省, 2023『令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』
- 山下美紀, 2012, 『子どもの「生きづらさ」—子ども主体の生活システム論的アプローチ』学文社.